

～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

◆VCN°37 シャトー・ド・プラド

生産地方：ボルドー

新着ワイン1種類♪

ACコート・ド・ボルドー・カスティヨン エルヴェ・アン・フュ・ド・シェーヌ 2019（樽熟赤）

例年は通常のカスティヨンと樽熟とは熟成前まで一緒に仕込むが、今回は樽熟にだけカベルネソーヴィニオンを入れ別々に醸造した。17, 18年はメルローが大幅収量減で品種割合は半分だったが、19年の樽熟はメルロー80%、カベルネフランが10%、カベルネソーヴィニオンが10%となっている。樽熟はいつも通り1年、その後は昔のボルドーのようにタンニンがこなれ始めるまで3年間カーヴでビン熟を経てリリースした。リーズナブルなワインなのになぜここまで手を掛けるのか？とベルナルに質問したところ、息子のロマンがシャトーを引き継がない意思を決め、66歳になるベルナルはリタイアができる年となり、今後どこまでシャトーを続けるか分からない状況の中、残された醸造は儲け抜きに後世に残すようなワインに仕立てたいという思いで仕込んでいると語ってくれた。2019年は当たり年に当たる樽熟ワイン。今がまさに飲み頃と言えるくらい美味しいが、こういうリーズナブルなのに実は隠れたポテンシャルのあるワインだからこそ、5年以上放っておいて熟成した時の本当の実力を実感してみたい…そんな魅力的なワインだ！

ミレジム情報 当主「ベルナル・フルニエ」のコメント

2019年は、春の遅霜と夏の記録的な猛暑に見舞われたにもかかわらず収量に恵まれたミラクルな年だった。暖冬で雨が多く、例年よりもブドウの萌芽が早かった。4月11日、12日に霜が降り主芽の大部分が被害に遭い、また、この霜の影響によりブドウの成長が一時的に遅れた。さらに追い打ちをかけるように5月5日に2度目の霜が降りた。幸い、副芽の萌芽が遅れたこともあり、2度目の霜の被害は最小限に済んだ。その後は雨が多く気温の低い日が6月初めまで続いた。幸いブドウの成長が遅れていたこともあり、開花は6月中旬と長雨が止まった後に始まり全てが順調に終わった。6月の下旬には、冷夏から一転5日間連続気温が40℃を超える記録的な猛暑に見舞われ、それ以降8月中旬まで一切雨の降らない日照りが続いた。猛暑はいったん収まったが、7月終わりに再び50℃を超える歴史的な酷暑に遭い、ブドウ畑も水不足が心配された。勢い良く成長を遂げていたブドウも、この2度の猛暑によりいったん成長にブレーキがかかった。8月に入ると猛暑は落ち着き、むしろ秋に近づく涼しさの感じる気候に変わったが、水不足は相変わらず深刻だった。だが、8月の終わりにまとまった雨が降り、この恵みの雨により水不足は一気に解消された。熟しのバラバラなブドウも一気に成熟にアクセルがかかり、最終的に酸の残ったブドウと完熟したブドウが上手く混ざったトータル的にバランスの取れた良い収穫ができた。

「ヨシ」のつ・ぶ・や・き

昨年夏の話になるが、ニュースでボルドーが深刻なミルデューの被害に遭っていると聞き、状況を確認するために直接プラドを訪ねてみた。ドメーヌに到着するや否やベルナルが開口一番「2023年はメルローの収穫がゼロという苦難を受け入れなければならない」と語った。彼も原因はミルデューと言うが、「ミルデューで全滅って…ボルドー液散布もしっかりと行っているのにあり得るの？」と実際の畑を見るまでは半信半疑だった。だが、メルローの畑に着くなり目の前に広がる異様な光景（写真①）に愕然とした。まるで火で焼かれたように見事にブドウが枯れている。



（写真①）ミルデューにより枯れ果てたメルロー



(写真②) Rot Grisの説明をするベルナル

垣根の中に入って一つ一つ丁寧に見て回ったが、どれもきれいに房が枯れてほとんどブドウが残っていなかった。「通常ミルデューは葉から徐々に房に広がるのだが、今回は直接ブドウの房が攻撃されたので何も打つ手がなかった」と語るベルナル（写真②）。6月下旬に開かれたワインサロンに参加していた最中に、彼の妻から「ブドウが枯れ始めている」という一報があり、急いで戻ったところ既に半分以上のブドウが萎み始めていて、その枯れていく状況を唯々指をくわえてみているしかなかったそうだ。「今回のようにブドウの梗を直接攻撃するミルデューのことを別名 Rot Gris（ロ・グリ）、Rot Blanc（ロ・ブラン）と言うが、葉に繁殖したミルデューと違

い目視できないため発見がとて難しい。Rot Gris と分かった時点ではもうすでにブドウがミルデューに侵され枯れ始めているため、ボルドー液を散布しても時すでに遅し。しかも繁殖のスピードも速く、今回は妻が気付いてから、わずか3日ほどで全てのブドウが枯れ果ててしまった」と彼は惨状を生々しく語った。INAOの発表では、6月初めに降った雨と気温の上昇による高温多湿状態がミルデューのパンデミックを生んだ要因とのことだが、ベルナル自身原因はそんなに単純ではないとINAOの見解に疑問を呈す。「1972年から畑仕事に従事する中で高温多湿の状況は今まで何度も経験してきた。だが、今回のように直接ブドウの房を襲う強烈なミルデューは今まで一度も経験したことがない。もちろん高温多湿も原因の一つではあるが、それ以前にボルドー不況により耕作を放棄した荒廃農地が至る所で放置されっぱなしにされていること自体が問題で、今回のミルデュー増殖の一番の温床の種は荒廃農地にあったと確信する」と持論を述べた。

現在、ボルドーは格付けシャトー以外、バブルがはじけたように深刻な不況に陥っている。かつて投資の対象としてシャトーを買い漁っていた中国も近年は停滞気味で撤退する企業も多く、放置された荒廃農地の増加の一要因ともなっているようだ。「真面目に地球環境を考えて仕事をする人間が結局バカを見る世の中だ」と半分自嘲げみに語るベルナル。彼曰く、今回のミルデューのパンデミックについて、皮肉にも最も被害が深刻だったのはビオロジックの生産者で、ミルデュー対策に化学農薬を使用した生産者は、公表はしないがどうやら最悪の状況は免れているようだ。「我々ビオロジック生産者がミルデュー対策として唯一許されているボルドー液は、葉やブドウの表面をミルデューから守るだけで、雨が降ると流れ落ちてしまう。効果の持続性が不安定なので散布のタイミングがとても重要となってくる。なので、今回のように急激に襲うミルデューの対処には、適当に撒いて運よく当たるみたいなこと以外に全く太刀打ちできない。一方で、化学農薬は一度撒くと農薬が葉やブドウの内部に吸収されるため効果が長く雨にも強い。一度撒くと2週間の効果があると言われていたので、ミルデュー繁殖時期に農薬の効果があった畑はおそらく助かっているだろう。正直、毎年1回の収穫のために毎日手を掛けた畑が一瞬にして全滅するとなると、ビオロジックがバカらしくなる気持ちも分からなくはない。」

彼には今年36歳になるロマンという息子がいる。一時はロマンもビオロジックに情熱を燃やし父親の跡を継ぐ意思を示していたが、ブラドは継がず、妻の両親のシャトーを引き継ぐという道を選んだ。「私も定年の年となり、あと何年ブラドを続けられるかは分からないが、私の代までは最後まで後世に残す地球環境を考えてビオロジックを貫くつもりだ」と試練の中に一つの光をさす言葉を語ってくれた。

ブラドもすでに引退までのカウントダウンが始まっている。ヴァンクウールの生産者の中では、リリース種類も少なく、華やかな生産者とは一見言えないかもしれない。しかしながら、実はこのブラドやデスクランプはボルドーの中ではビオロジックのパイオニア的な存在で、長年ビオロジックで培った彼らのブドウにはポテンシャルが充分以上にもものすごくあること。ブラドの引退も見え隠れしているからこそ、こういうコストパフォーマンスの高いワインをさりげなく寝かせて、10年後、もしくは20年後にブラインドで開けてみたいと思う今日この頃だ！

(2023.8.16.ドメーヌ突撃訪問より)

※弊社HP「フォト・ギャラリー」より、カラーでサイズの大きい鮮明な写真をぜひご覧くださいませ